

氏名	池内 朋子 (イケウチ トモコ)
本籍	東京都
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博乙第16号
学位授与の日付	2016年9月3日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	高齢期の Well-being と未来時間展望との関係

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	杉澤秀博
	(副査) 桜美林大学教授	長田久雄
	桜美林大学特任教授	直井道子
	早稲田大学教授	鈴木晶夫

## 論文審査報告書

### 論文目次

I. 序論	1
研究の目的	6
II. 研究	7
1. 未来展望尺度の作成	7
1) はじめに	7

2) 方法	9
3) 結果	11
4) 考察	15
2. 高齢期の未来時間展望、社会的ネットワークの選択、感情的 well-being の関連	18
1) はじめに	18
2) 方法	21
3) 結果	24
4) 考察	27
III. 総合的考察	30
謝辞	
文献	

## 論 文 要 旨

主観的 well-being の関連要因に関する既存研究では、社会関係の多寡に着目した研究が多かった。他方では、心理的要因として未来時間展望、meaning、アイデンティティなどに着目した研究が行われてきた。しかし、以上の研究の多くは社会的要因と心理的要因の影響がそれぞれ別々に分析されており、それらを構造的に捉えるという視点が弱かった。社会情動的選択性理論は、心理的要因の1つである未来時間展望に着目し、それが社会関係に影響することをモデルに位置づけた数少ない理論の一つである。この理論では、未来時間展望が狭いという知覚は、今の情動的満足や価値を含んだ情動的目標を優先させることで、この目標を達成するために情動的満足を高める社会関係を選択する。しかし、この理論は、加齢に伴う未来時間展望の知覚の変化と社会的ネットワークの選択の変化の関連についてのモデルを提供しているものの、若年者から高齢者までを視野に納めており、高齢者に限定したモデルとはいえない。加えて、社会的動機・目標やその変化を評価する指標が存在せず、さらにアウトカムとして「期する結末」を設定しているが、この予期する結末は何かという具体的な指標の提示はない。以上のような研究の現状を踏まえ、本研究

では、高齢期の感情的 well-being と関連する要因として、未来時間展望の知覚という心理的要因と社会的ネットワークという社会的要因に着目し、これらが高齢期の感情的 well-being にどのように影響するか検証を行った。具体的には、以下 2 つの研究課題を設定した。研究 1 では、欧米で用いられている未来時間展望の知覚を測定する尺度 (Future Time Perspective Scale; Carstensen & Lang, 1996) の日本語版を作成し、この尺度の日本における信頼性・妥当性を検証すること、研究 2 では、未来時間展望の知覚、社会的ネットワーク、感情的 well-being の変数間の関連を構造的に捉えるモデルを設定した上で、研究 1 で作成した未来時間展望の知覚測定尺度を用いて、その妥当性の検証を行うこと。分析の結果、研究 1 では、日本においても未来時間展望の知覚を測定する尺度の妥当性・信頼性が検証された。研究 2 については、aging well together モデルに依拠し、次のような仮説を立てた。高齢者の中でも未来時間展望の知覚が広い人では、将来への影響を考え、情緒的に満足を得る密な人間関係よりも、将来に役立つ情報などを獲得するような人間関係を追求することで、感情的 well-being の向上につながる。社会的ネットワークは、家族・親族、友人、知人・社会的活動仲間という 3 種類に区分した。分析の結果、高齢者の中でも未来時間展望の知覚が広い人では、3 種類のネットワークのいずれに対しても有意な肯定的影響を与えており、仮説が支持された。感情的 well-being に対しては、家族親族とのネットワークのみが有意な効果があり、仮説の一部が支持された。研究の限界として、研究の対象者が高齢者を対象とした生涯学習施設の利用者に限定されたため、ネットワークの分散が過少に評価され、仮説検証が十分にできなかった点を指摘した。総合考察として、次の点を指摘した。従来の研究では、高齢期の感情的 well-being の心理的要因と社会的要因を構造化する試みに乏しい。本研究は、未来時間展望に着目しつつ、それが社会的ネットワークに与える効果を視野に納め、関連要因の構造化を試みた。その結果として、分析モデルの妥当性がある程度検証された。

## 論文審査要旨

本研究は、主観的な well-being に関連する要因の解明について、次の 2 つのオリジナルな点を含んでいる。第 1 は、心理的な要因の一つとして未来時間展望の知覚を測定する日本版の尺度を開発した点である。日本では、過去、現在、未来の時間的信念や態度を測定する既存の尺度があるが、未来時間展望の知覚に特化させた測定尺度は存在しない。第 2 には、この未来時間展望の知覚と社会ネットワークとの関連を視野に納め、感情的 well-being の関連要因を構造的に明らかにした点である。既存研究では、主観的な well-being の関連要因については、心理的要因、社会的要因の影響を別々に評価する分析モデルが多く、両者を組み合わせ、関連要因を構造的に分析したモデルはほとんどない。しかし、以下の点で課題があるとの指摘がなされた。第 1 に、分析モデルは独創的であるものの、それを検証するための分析対象が、生涯学習施設の利用者に限定されている点、社会的ネットワークの測定に関する理論的な枠組みが十分ではない点。以上のような課題はあるものの、博士論文として合格であると判定した。

## 口頭審査要旨

本研究の評価できる点として、以下の指摘があった。①主観的 well-being の心理的要因として未来時間展望の知覚に着目し、その測定尺度の開発を行ったこと、②未来時間展望の知覚が社会的ネットワークに与える影響を考慮し、主観的 well-being の関連要因を構造的に捉えた分析モデルを設定したこと、③博士論文の計画段階では、社会情動的選択性理論の妥当性検証を目的として未来時間展望の知覚に着目していたが、実証研究の分析モデルとしての限界を踏まえ、主観的 well-being の関連要因の研究として再構成したことで、論文のストーリーが明確になったこと。他方では、本研究の限界と今後の課題として次の指摘があった。①考察では、便宜的な標本を選択したことを限界として指摘しているものの、計画の段階でこの問題についてきちんと検討し、地域の高齢者標本を対象とするよう計画を立てる必要があったこと、②社会的ネットワークが感情的 well-being に有意な効果がなかったのは、社会的ネットワークの測定尺度に問題があった可能性もあることから、この点についても今後の課題としてきちんと記述すること。以上に関連した質疑がなされ、池内氏から適切な回答がなされた。以上により、審査員全員一致で合格と判定した。